

第1回札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会専門部会 (経済、スポーツ・文化分野) 会議録

日時：令和3年9月16日（木）10時開会

方法：オンライン開催

※事務局会場：札幌市本庁舎 12階1号・2号・3号会議室

(札幌市中央区北1条西2丁目)

出席：川島委員*、木村委員*、佐藤（大）委員*、柴田委員*、中田委員*、原田委員*、平本部長、山本（一）委員*、山本（強）委員*（*…オンライン出席）

事務局：浅村政策企画部長、本山企画課長、田中企画係長、熊谷企画担当係長

1. 開 会

○事務局（浅村政策企画部長） お時間となりましたので、札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会の専門部会を開会いたします。

私は、まちづくり政策局政策企画部長の浅村でございます。

7月の審議会では、専門部会の設置についてご提案いたしまして、ご了承をいただいたところですが、本日は、基本目標の中の8分野のうち、経済とスポーツ・文化の2分野について審議をいただきたいと考えております。まちづくりにおいて、まちの活性化に資する重要な分野であると考えておりますので、ぜひ、皆様の知見をいただきながら、議論の深掘りをしていただければなと思っております。

本日は、よろしくお願いいたします。

○事務局（本山企画課長） 事務局を務めさせていただきます札幌市まちづくり政策局政策企画部企画課長の本山でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の専門部会には、9名の委員にご参加をいただいております。

また、本日は、市役所関係課もオブザーバーとして事務局と同じ会場から会議に参加しております。参加者はお手元に配付した名簿のとおりですが、スポーツ局招致推進部については他の公務の都合により欠席となっております。

なお、本日は、新型コロナウイルス感染症の状況に鑑み、オンラインでの開催とさせていただきます。そのため、委員の皆様にご覧がございませぬ。まず、マイクについては、音声環境向上のため、ご発言のとき以外はミュートの設定にさせていただきますようお願いいたします。また、ご発言される場合は挙手をお願いいたします。進行担当から指名いたしますので、ミュートを解除の上、ご発言いただきますようお願いいたします。

それでは、この後の議事進行については、平本部長にお願いしたいと存じます。

平本部長、よろしくお願いいたします。

2. 議 事

○平本部長 皆様、おはようございます。

今日の札幌は天気が大変いいのですが、残念ながら、こういう形でオンライン開催ということになりました。オンラインでありましても活発なご議論をいただければと思っていますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、次第に沿いまして、早速、議事に入らせていただきます。

今日は、主たる議題である基本目標ごとの目指す姿・取り組むことについてご議論をいただくこととなります。

まず、事務局より、資料に基づいてご説明をいただきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

○事務局（本山企画課長） まず、参考資料1の第2次札幌市まちづくり戦略ビジョンの構成イメージをご覧ください。

この資料は前回の審議会でお示ししたのですが、本日の議事がビジョン編のどこに関わるものか、改めて確認をさせていただきます。

資料の右側のビジョン編の第4章においては、今後のまちづくりの方向性をより具体的にイメージできるよう、基本目標ごとに「目指す姿」を示すとともに、その実現に向けて、市民・企業・行政が同じ方向で取り組めるよう、「私たちが取り組むこと」を明記しています。

本日は、これまでいただいたご意見を踏まえ、経済分野、スポーツ・文化分野の「目指す姿」と「私たちが取り組むこと」の事務局案をお示しします。

また、参考資料2と参考資料3については前回の審議会でお示ししたのですが、全分野の内容を把握できるよう、参考として配付しております。

それでは、資料1の経済分野をご覧ください。

1枚目は、基本目標を導き出した経緯を表しておきまして、前回お示ししたユニバーサル、ウェルネス、スマートというまちづくりに共通する三つの重要な概念と札幌市のSWOT分析の考察から導いた基本目標を記載しています。

前回の審議会からの変更点は、基本目標10と基本目標11の赤字箇所になります。これまでいただいたご意見を基に、基本目標10は経済を牽引していく分野、基本目標11は経済成長を支える横断的な取組という整理をさせていただき、チャレンジできるという観点を基本目標10から基本目標11に移動させています。

次に、ページを1枚おめくりいただき、基本目標10の「強みを生かした産業が北海道の経済をけん引しているまち」から説明させていただきます。

ここでは札幌の強みとされる分野にスポットを当て、「目指す姿」の案を二つ掲げています。

「目指す姿」の一つ目は、「札幌市・北海道の強みである食、観光分野の産業が、時代の潮流を的確にとらえ、国内外からの新たな消費を生み出し、札幌市はもとより北海道の

経済成長をけん引しています。」としています。これは、強みである食と観光分野の産業が、札幌はもとより、北海道の経済を牽引している姿を表しています。

なお、事前にお送りした資料の案を一部変更しまして、新型コロナウイルスの影響を受けた食・観光分野が、時代の潮流を捉え、新たな消費を生み出し、経済を牽引する分野として成長をし続けているという観点を赤字で追記しております。

「目指す姿」の二つ目は、「健康福祉・医療、IT、クリエイティブ分野の産業が、国内外から投資や人・企業を呼び込み、札幌市の新たな強みとして更なる成長を遂げています。」としています。これは、今後、さらなる成長が期待される健康福祉・医療、IT、クリエイティブ分野が成長し、食・観光分野と併せて北海道経済を牽引しているという観点になります。

この二つの「目指す姿」を実現する上で必要な取組は、資料の右側の「私たちが取り組むこと」に記載しております。現行のビジョンと比べまして、新しいものには【新規】、レベルアップするものには【レベ】と表記しております。

続いて、1ページをおめくりいただきまして、基本目標11に移ります。

冒頭でご説明したとおり、チャレンジできるという観点を基本目標11に持ってきたため、「多様な主体と高い生産性、チャレンジできる文化が経済成長を支えるまち」に変更しています。

「目指す姿」の一つ目は、「中小企業・小規模企業や商店街など、事業を営むもの全ての活動が活発で、地域のにぎわいや経済を支えています。」としています。これは、市内企業の大半を占め、市民生活を支えている中小企業や小規模企業、地域コミュニティの担い手である商店街が地域経済を支えているという観点になります。

続いて、「目指す姿」の二つ目は、「様々な分野でデータや先端技術が活用され、生産性が向上し、人口減少社会においても持続的な経済成長を遂げています。」としています。これは、人口減少社会に対応するため、デジタルトランスフォーメーションの推進などにより様々な技術を活用しながら生産性を向上させるという観点になります。

次に、「目指す姿」の三つ目は、「行政、大学、民間組織等の関係機関が一体となり、起業家を育成・支援する体制や環境が充実し、誰もがチャレンジできる文化が根付くことで、多くのスタートアップが生まれ続けています。」としています。これは、冒頭でお話しした基本目標10から基本目標11へ移したチャレンジの要素となっており、行政、大学、民間等、多様な組織が協力し合い、スタートアップを支え、育てていくというビジネスのエコシステムが確立し、チャレンジできる文化が定着しているという観点になります。

最後に、「目指す姿」の四つ目は、「様々な企業が数多く立地、創業し、スタートアップの集積や産学官連携、国内はもとより海外の企業等とも活発な交流を行うことにより、新たな価値が創出され続けています。」としています。これは、市内に企業が集積し、様々な連携交流を重ねることで新たな企業や価値が生まれ続けている状況を表しています。

「私たちが取り組むこと」については、資料の右側に掲載しております。

続いて、ページをめくっていただいて、基本目標12の「雇用が安定的に確保され、多様な働き方ができるまち」についてです。

「目指す姿」の一つ目は、「安心して働ける魅力的な雇用が安定的に確保されるとともに、企業も必要とする人材を確保できています。」としています。これは、市民と企業の双方の立場から十分な雇用と人材が確保できているという観点になります。

「目指す姿」の二つ目は、「女性、高齢者、障がい者など多様な人材が持てる能力を發揮し、誰もがやりがいや充実感を得ながら働くことができている。また、高い専門性を生かすことができる職場で、若い世代を中心とした幅広い年代の人材が活躍しています。」としています。これは、多様な人材の雇用が確保されているということと、若年層を中心とした理系人材等、専門性の高い人材が道外に流出することなく、札幌で働くことができているという観点になります。

なお、事前にお送りした資料の案から、多様な人材に関する説明を追記するとともに、若年層の地元定着という観点を赤字で明記しております。

「目指す姿」の三つ目は、「働きやすい職場環境が整備されるとともに、多様で柔軟な働き方や、仕事と生活の調和のとれた生き方が実現しています。」としています。これは、テレワークの導入等、多様な働き方が整備、浸透し、一人一人の仕事と生活のバランスが取れているという観点になります。

「私たちが取り組むこと」は、「目指す姿」の1から3の枠組みをまたぐ要素が多いため、一括した書き方になっております。

私からの説明は以上でございます。

○平本部長 それでは、本日のメインの議事であります本件について、委員の皆様方からご意見をいただきたいと思っております。

今日は、専門部会ということで、人数が限られておりますので、お一人お一人を指名してご発言いただくのではなく、挙手の上、ご自由にご発言をいただきたいと思っております。

また、後半はスポーツ・文化分野の議論を行いますので、おおむね11時頃をめぐりに経済分野の議論を進めたいと思っておりますので、ご協力をお願いいたします。

それでは、どなたからでも結構ですので、お願いいたします。

○山本（一）委員 基本目標12についてです。

目指す姿の案はとてもよろしいと思うのですが、現実問題として、あれからどうやったらいいだろうと思うことがあります。

実は、私は子育てをしながら会社を経営しておりましたし、今も介護をしながら会社を経営しているのですが、様々な働き方ができることが若い方たちの子育てをしながら働く環境ということにつながるのではないかと考えていまして、安心して子育てをするための子育て支援仕事バンクといったような構想があるといいなと思っておりました。

補助金制度が札幌市にありまして、独り親の支援もございますけれども、やはり、長期にわたる子育ての中で仕事と子育ての両立ができる仕組みがないといけないと思っております。

ますし、一企業にそれを全てお願いするわけにもいかなくなっていくのではないかと思います。

今、たまたまりモートワークが非常に大きく推進されましたので、子育てをしながらリモートで働くことができる仕事がたくさん生まれていると思います。もしくは、企業の中でもこれはリモートでというふうになっていると思います。子育て期間に安定して仕事を得られる、高付加価値の仕事、高い給料をいただける仕事で、子育てのための時間を持ちながら時間を調整して働くことができるということがやはり理想だと思います。

そういった仕事はいろいろなところにあると思います。産学官のどこにでももしかしたらお願いできそうな仕事があるような気がします。

例えば、企業であれば、ホームページやプレゼン資料の作成、ITコンサルや経営コンサル、研究開発に関わる書類の作成など、お願いできれば助かるなという仕事がたくさんあります。多分、大学にも、研究支援の事務仕事やデータの分析、ソフトウェアの開発など、いろいろとあると思いますし、札幌市にも専門性の必要なリモートでできる仕事があるのではないかと思います。そういった仕事を集めて、それを特に子育ての世代の方たちにお願ひすることができるような仕組みと申しますか、財団や公的機関のような仕組みの中でそれを分配できると、子育ての5年間や10年間の間にそういった仕事で働けるのではないのでしょうか。両親ではなくても、片方の親が家で子どもを見ながら働ける、これは理想的な考え方かもしれませんが、そういったことがもしもできるのであれば、本当に子どもを幸せにできるのではないかと私は考えました。

○平本部長 特に、前半でお話いただいた子育て支援仕事バンクというのは戦略編にも構想として入ってきそうなお話だと思います。

ほかの委員の皆様方はいかがでしょうか。

○山本（強）委員 私は、情報産業に近いのですけれども、経済のことに関して言います。

今、札幌市は、Startup City SAPPORO というある種の方向性を出しているのですね。この方向性は非常にいいと思っていて、単に、維持する、誘致するではなく、新しい産業の創出を旗印に上げるというイメージがいいと思っています。でも、旗を上げれば全部出てくるかというとなんかそうじゃないわけで、ビジョンですから、新しい産業をつくるということのワクワク感をもう少し打ち出してはどうか、と思うのですね。

1980年代ぐらいかな、もう大分昔ですけれども、厚別にテクノパークをつくったとき、ほかのところにないインフラができたということで、それが結構ワクワク感になったのです。このタイミングというのは何なのだろうと考えているのです。

今、国は、Society5.0 やデジタルトランスフォーメーションというキーワードでワクワク感を無理やりつくろうとしているのは分かるのだけれども、いま一つ具体的に見えないのです。私もいろいろなところで講演をしますと、Society5.0 とは何ですか、DXとは何ですかと最初に聞かれるので、これがワクワク感だと思えないのですよね。札幌市では、ワクワク感を具現化するイメージというか、これから行くぞという見え方をこの中に

書けたらいいなと僕は思っています。

これは僕の見方なのですけれども、Society5.0 というのは社会システムのことを言っていますよね。今までは、トッピング的に、情報をつけたらおいしくなりますよという感じだったのだけれども、今起きているのは、従来型の交通や工場などの重要なインフラが情報空間に移るというもので、情報がインフラで、その上に生産や流通が乗っかるよという話をしているわけです。例えば、札幌市は、新しい情報の国内の流通拠点にする、そのための条件が整っている、あるいは、地政学的に見て、北に向けたゲートウェイになるなど、そういうことをどんと打ち出していいのではないかなと思っています。

実際、札幌市は、Startup City を標榜し、もう動いているわけですから、単に旗だけではなく、実体が伴っているということで、この先、これを具現化していくわくわく感をこの中に盛り込めたらいいなと思っております。

○平本部長 わくわく感というのはビジョンにはとても重要だと私も思っています。ご提言をありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

それでは、中田委員、柴田委員の順番でお願いいたします。

○中田委員 経済分野に限らず、次のスポーツ・文化もそうですが、今まで委員の皆さんが提案された意見がおおむね反映されているのかなと思っています。

私からは、基本目標11の「多様な主体と高い生産性、チャレンジできる文化が経済成長を支えるまち」について意見を言いたいと思います。

特に目指す姿の2番目かなと思うのですけれども、データの扱いに関することです。

今、オープンデータということが叫ばれております。企業においても、この先、数あるデータをどのように加工し、取り入れて、それを事業に生かすかが大切になってくるとも叫ばれている昨今です。行政の持っているデータは非常に多種多様で、膨大なデータ量だと思います。そのデータをどの程度オープン化できるかはこれからの議論になると思いますし、かなりの部分をオープンにされているとは思いますが、例えば、企業にとってマーケティングに必要なデータや様々な要望に対するデータを行政が持っているのであれば、それをオープン化していくシステムを取り入れることができるのであれば、企業が事業戦略を考える上でも非常に有効に進むのかなと思っております。

もう一つ、当該基本目標に関する今後の課題、新たな視点の2番目に関することです。

先端技術・研究を活用したイノベーションを創出することに特化している書き方なので、恐らく、そういった意味から、あえて理系人材の定着という言葉にしているのかなと思います。確かに、先端技術では理系人材が大事だと思うのですけれども、札幌市という地区の我々にとって必要なのは、理系人材ばかりではなく、幅広い知識を持った様々な分野の人材を採用し、企業として生かしていくという視点が大事なのかなと思っておりますので、そういったことも含み置いて表現していただければと思います。

また、先ほど山本委員からも話がありましたけれども、スタートアップのわくわく感は

非常に大事だなと思います。わくわくして事業を起こした後のフォローといいますか、どのような支援でもってさらに高みを目指していくかで、達成感を得るためにはフォローが必要だと思います。そういった意味では、スタートアップの事業に対するフォローをいかに充実させていくかという視点も大事かなと思っておりますので、そこを強調していただくのもいいのかなと思います。

○平本部長 データのオープン化、幅広い人材、スタートアップ後のフォローという主に3点についてご指摘をいただいたと思います。どうもありがとうございます。

次に、柴田委員、お願いいたします。

○柴田委員 基本目標12の目指す姿の2番目に女性、高齢者、障がい者とあって、なぜか米印のところにプラスして外国人等とついているのですが、その問題に関連して考えていたことを述べたいと思います。

僕は大学教授の立場としてここに出ているのですが、実は、アーティスト・イン・レジデンスという外国のアーティストを札幌に滞在させ、作品をつくらせるという事業を運営するNPOを運営しており、その文化事業が22年目になります。ご存じのように、今はコロナ禍ですので、国際便はほとんど飛んでいないわけです。それで、この事業はなくなるのかなと思ったら、助成先の文化庁は、「リモートで行うのもよい」と言うわけです。

この事業は、ヨーロッパでは350年ぐらい続いているのですけれども、日本だけリモートレジデンスありという状態です。でも、この特殊な状況は意外と興味深いと思っています。過去のパンデミックにおいても、カミュの「ペスト」など、苦しい時代を反映した新しい作品が生まれました。そして、過去のパンデミックになかったもので、今回はある文化といえば、インターネットなのです。これは何かを新しい関係を生む装置になる。

実は、今、自分の事務所には、30畳ぐらいあるのですけれども、僕一人しかいないのですよ。うちのスタッフのひとは日本人ですが、イギリスに移住しており、時折、帰国して仕事をしていましたがロックダウンで帰国できなかった。ほかのスタッフや、お世話しているアーティストも別の場所に住んでいて、札幌をテーマにした作品をイギリスとフランスでつくり、それを札幌市のギャラリー施設に展示するというように全員リモートで仕事をしている状況になっているのです。

これはやりづらいのですが、もしかしたら何か新事業のスタートになるかのかも、とも思っています。要するに、札幌に住所がある人たちだけをテーマに考える必要はないのではないかとこととして、インターネット上に共住する人々と一緒につくっていくという考え方をしてもいいのではないかなと思っています。うちは既にそういう状態になってもあります。

ですから、ウィズコロナ、アフターコロナの状況を考えた次のビジネス展開というか、そういう状況下での国際事業支援、スタートアップなんかに力を入れるような機関があると、すごく魅力的だなと感じました。

○平本部長 目指す姿の案の2番目に外国人という言葉も入れたほうがいいのではない

かというご提言も含まれていたと理解しました。もう少し網羅的に書いたほうがいいかもしれないですね。

それから、札幌だけに限定する必要はない、あるいは、今のパンデミックの時代におけるインターネットの意義などについてのご指摘もどうもありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○原田委員 観光について少し意見を述べたいと思います。

北海道の観光は、これまで、エコノミークラスの戦略で、たくさんの人に来てもらい、安く広くお金を使ってもらおうということだったのですが、今後は、多分、ビジネスクラス戦略で、富裕層をターゲットにしていくというめりはりをつけた観光政策が必要になると思います。

私がやっているスポーツビジネスの世界でも、安いエコノミーチケットにプラスして、これからビジネスクラスをやろうということで、ホスピタリティーといいますか、付加価値をつけて高いチケットを買ってもらおうと動いています。ファイターズも新しい球場をやろうとしておりますし、ウインターリゾートをこれから目指すわけですけれども、ニセコでは、いち早く外資を導入し、1泊10万円、20万円ぐらいのホテルをつくっていますよね。そういうところを目指していく必要があるのかなと思います。

それに、観光で言うと、医療ツーリズムのほうにも目を向けつつ、客単価を上げていくという方策が必要になるのかなと思います。

それから、二つ目です。基本目標11に産官学連携という文言があるのですが、今後は公民連携が非常に重要になるだろうとっております。今、廃校の数を見てみると、日本で一番多いのが北海道で、2番目が東京なのですね。こうした廃校の3割か4割はスポーツ合宿施設や地域のスポーツ施設に転用されるというトランスフォーメーションが起きていますので、今後、公民連携というキーワードを入れながら、先ほどのスタートアップにもつながると思うのですけれども、若いイノベティブな力を呼び込み、旧来のインフラを徐々に変えていく試みが今後は重要かなとっております。

○平本部会長 ビジネスクラスの観光と公民連携というご提言をいただきました。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○山本（一）委員 基本目標10ですけれども、強みを生かした産業の中に再生可能エネルギーの促進は外せないかなと私は考えました。やはり、産業の基盤であるエネルギー、そして、防災の観点からも地産地消のエネルギーが重要だと考えております。

先日、札幌市地域防災計画の資料をいただきまして、被害想定を拝見しましたら、冬期に凍死者が激増するという記載でした。もし冬期の災害で死者が多く出た場合には、観光都市・札幌の雪のポジティブなイメージは全くなくなると思いますので、想定された死者を出さないためにどのようにすればいいのかを実際に実現することが重要かなと思います。

例えば、再生可能エネルギーの普及を促進し、避難所や病院、公共施設など、災害から

市民を守る場所に優先して設置する、それにプラスして、再生可能エネルギーの促進と地産地消の促進が実際にまちを救うことに貢献するイメージを打ち出すということです。

さらには、地熱では、札幌市には定山溪や豊羽などのポテンシャルのある地域もありますので、防災、経済という様々な観点から、ぜひ再生可能エネルギーの推進を基本目標10の「強みを生かした」のところに加えていただけたらと思います。

○平本部長 再エネは、これからの社会においてとても重要なキーワードだと思います。今回は、経済、スポーツ・文化部会なのですけれども、今の山本一枝委員のご提言は、地域、安全・安心とも関わりますし、環境問題とも関わる話です。ある意味、この部会の枠を超えたご提言とも思います。他の部会とも連携しながら、そういったことを一つの軸に据えていくことが重要なのかなと思いました。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○柴田委員 先ほど原田委員から廃校の活用の話が出ていたのですが、僕は廃校の調査の本を出しております、文化的活用に関しての本を教育大のチームでまとめ、授業でも取り上げています。これは、札幌だけではなく、北海道の話ですが、先ほどの原田委員のお話のように、実は全国の10%以上が北海道の廃校数になっています。これは物すごい数で、2位の東京の倍以上です。それに、これは北海道の物すごく負の遺産となっています。でも、この負の遺産をいいものに変えていくというのは非常にヒントになるし、札幌にその情報を集めるというか、音頭を取ってやっていくという仕事はすごくいいことだと思います。

これは空き家問題と連携しています。要するに、子どもたちの世界の話というのは空き家と連携しているので、空き家というのはこれからすごく深刻な問題になると思うのですが、そこに対してポジティブなビジネス的なよさも考えた解決策を示していくのはすごくいいと思うのです。要するに、全国の中でも素材を一番持っている土地だということです。

○平本部長 廃校及び空き家という、一見、マイナスの資産に見えるものは、うまく活用するとプラスの資産に転換できるし、札幌を含めた北海道がそういうポテンシャルを非常に多く持っているというご指摘だと思います。私も後で申し上げようと思っていたのですが、そういう視点はとても重要だと思っています。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○佐藤委員 たたき台を拝見しますと、とてもうまくきれいにまとめられていて、聞こえもすごくいいなと思ったのですけれども、全体を通じて、札幌らしさといえますか、現実的にできるのかな、大丈夫かなという疑念があるところが気になっています。

例えば、スタートアップについては委員からもいいというお話が出ていたと思うのですが、STARTUP CITY SAPPORO の事務局の方とお話する機会があって、聞いたことがあるのです。現場でどういうことが起こっているかとか、大学生を抱えていますので、文系の大学生をそういうところとつなげてくれないかという話もしたりするのですけれども、現

実的にこういった取組をやるときに、仕組みはいいのだけれども、それを担う学生、若い人たちがどれだけいるのか、実際にやらせたときに本当にクリエイティブなアイデアが出てくるのかということ、結構惨たんたる結果とは言いませんが、現実的にはなかなか難しいとか、それはビジネスになるのですかということから始めなければならないなどの厳しい現実があるのです。もちろん、そういった人たちを育てていくのが大事な取組だと思うのですが、一方で、札幌で気になるのは、若い人が外に出ていってしまっているという元栓のところを緩めたまま、いろいろなことをやっていったとしても、いい人材や優秀な人材、頑張りたい人は東京などの道外に出ていって、残った人たちがそれなりのチャンスを生かしてやっていくのだけれども、それでは限界があるし、アイデアもなかなか出てこないみたいなことを繰り返しているような気がするのです。

私は大学にいるので、その立場から言うのですが、例えば、基本目標11の3の産官学の連携についてです。ここをご指摘の委員もいらっしゃいましたけれども、全く同感でして、単に起業家を育成するということだけのために産官学の連携を強めて何かをやっていくのではなく、もうちょっと広い意味で産官学の連携を考えてもいいのかなと思いました。

例えば、大学に進学する若い人たちは、優秀な人ほど東京に出ていってしまう傾向があるという残念な現実もあるのですが、何で東京の大学に行くかということ、もちろん偏差値が高いという理由もあるのだけれども、アルバイトやインターンシップ、就職のチャンスなど、いろいろな経験のチャンスがあると知っているからです。つまり、大学だけの魅力でほかに出ていっているわけではなく、大学を含めたまちに魅力を感じて行っているような気がするのです。

札幌には大企業はそんなにたくさんないですが、地元に着した中小企業はすごくたくさんあるのです。大学生が学んだり、場合によってはインターンシップでもそうですけれども、刺激を受けたりとか、そういった実地のチャンスはそういうところにすごくたくさん転がっていると思うのです。

ところが、私自身の反省も含めて言うと、大学はどこも閉鎖的で、大学同士の連携もなかなかなければ、企業との連携なんてほとんどないと言ってもいいのではないかなと思うのですね。つまり、学校の中だけで終結してしまって、外とのつながりがないのです。それで若い人たちがわくわくする楽しいまちだと感じるかということ、大学と家との往復、アルバイト先にちょっと行くぐらいはやっているのだけれども、それだけだよと映っている可能性もあるような気がするのです。ですから、もうちょっと広い意味で大学生がもっと外に出ていける、アルバイトやインターンシップだけではなく、もうちょっと大きな意味で、大学の教育カリキュラムの中に中小企業がどんどん入っていくでもいいし、中小企業が大学にもっと入り込んでいろんなことを協力するでも構わないですから、そうしたほうがいいと思うのです。

多分、これまでの経緯を含め、それぞれが自分でやるのはなかなか難しいと思うのです。大学側から企業に行くのもなかなか難しいし、大学は学生を囲いたがりますので、学生を

外に出すという発想はなかなか持ちにくいです。そこをうまくつなげるといふ第三的な、つまり、まちとしてやりましょうといふか、市としてバックアップしていくのだといふことを強く推進していくことがすごく効果的だと思います。そうすると、札幌らしいとか、中小企業とつながっているし、オープンな大学でということになるわけですね。それに、そういう魅力ある大学や教育をやっていれば、結果として、そこに行こうといふ若い人たちが増えるわけで、優秀な人がまちに残っていくといふ循環をつくっていけるとも思います。そういったエコシステムみたいなものについて、教育など、そういう若い人たちに対して力点を置いたような取組として展開されたらすごくいいなとこれを拝見して思いました。

○平本部長 今の佐藤委員のご提言は、大変に夢のある内容ですね。若い人たちが札幌にとどまりたい、ないしは、札幌をチョイスしてほかの都市から来ていただけるような、そういうある種のエコシステムを目指すことをビジョンに掲げたらどうかということだったかと思います。私も同じ大学にいる身として、大学は閉鎖的だと感じています。おっしゃることはそのとおりだなと思いました。どうもありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○木村委員 基本目標12に括弧でダイバーシティの推進らしきことが記載されていますよね。先ほどからおまけみたいになら外国人が出てくるとか、女性の雇用の話も出てきていて、それに関わることです。

ここは雇用の安定のくだりだから仕方がないことなのかもしれませんが、ダイバーシティと言うと、属性のダイバーシティと もっと深層的な価値観みたいな、いろいろな価値観を持つ人が職場の中でインクルージョンされ、それがイノベーションの源泉になっていくみたいなのが目的だと思うのです。つまり、企業のイノベーションの源泉になるからダイバーシティは進めるもので、その手前に働き手の確保みたいなのところもあってという感じですので、大目的のこれをするのがイノベーションの源泉になるからというのを書いておいたほうがいいと思います。

働き手の数が確保できるからということだけにすると、では、子どもを預かってあげれば、時給の仕事でも来てくれるから、女の人が働き続けてくれるとなってしまうのです。それは手前のところでは必要ですが、もっといろいろな属性や価値観の人が集まり、それぞれの強みを生かし、発揮し、会社なりまちなりにおいて、もっと付加価値が高い仕事が、企業として価値が出せるようになるためにダイバーシティを推進するということが分かる記載になるといいのかなと思います。

今だと、物すごく手前のダイバーシティや雇用の安定になっているので、もうちょっと奥の大目的を書いたほうがいいのではないかなと思います。起業家の卵を連れてこようとしても、おじさんばかりの札幌のまちの中で若い人が起業したいかといふと、別に結構だとなり、東京、さらにはシリコンバレーでも行ったらいいみたいになってしまうのです。札幌でやってくれるためには、札幌がインクルーシブなまちであったほうがいいですし、

それがある基本目標12にしたほうがいいのではないかなと思いました。

○平本部長 大変重要なお指摘です。例えば、基本目標12の目指す姿の2に女性、高齢者、障がい者などを書いてあるのですけれども、これは、男性社会を前提にした書き方になっているわけですね。わたしはこれ自体が時代遅れなのではないかと思っています。素案では、たしか、あらゆる人々が、全ての人々がという書き方になっていたような気がするのですが、もしかしたらそのほうがいいかもしれないかなと思いながら伺っていました。

これは決して行政側の意識が低いのではなく、具体例を書いてしまったことによって前段しかフォーカスしていないように見えてしまったのではないかということです。今の木村委員のお指摘はとても重要なことですので、事務局に基本目標の考え方などをご検討いただきたいと思います。ありがとうございます。

それでは、川島委員、お願いいたします。

○川島委員 全体を通しまして、前回までのご審議の内容を非常に反映していただきましたので、本当にありがとうございます。

私からも基本目標10に関連することについてです。

目指す姿の中に健康福祉や医療とありまして、また、私たちが取り組むことの中に観光コンテンツの創出とあります。こういうコンテンツや、健康福祉、健康医療は、先ほど原田委員がおっしゃったとおり、スポーツとも非常に関連性が高いと思っております。次のスポーツ文化の中にも同じようなくだりが出てまいりますので、ビジョンではないのかもしれませんが、一体となって考えていくことが必要だと強く感じたところです。

○平本部長 ただいまのお指摘の点は、部会の性質にも関わる内容です。経済は経済、スポーツ・文化はスポーツ・文化と、切り分けができる部分もあるのですけれども、もう少し総合的に考えなくてはいけないということはおっしゃるとおりだと思います。後半も含めまして、引き続きご議論とご提言をいただければと思います。

全ての委員の方から1回はご発言をいただきましたので、私からも申し上げたいと思います。

冒頭に山本強委員がおっしゃったわくわく感ということと関連して、北海道で経済についてできることは何なのかについてです。

先ほど柴田委員がおっしゃったこととも関わるのですが、まだ有効活用されていないリソース、それから、何となく厄介なものだなと思っているものでも、うまく使うとプラスに転換できるというものがあると思うのですね。

札幌市の例ではないですが、ニセコの雪というのはまさにそれです。雪というのは、倶知安町やニセコ町の人たちにとって物すごく厄介な存在なわけですね。札幌市民にとっても、年間5メートルの雪が降るので、同じだと思うのですね。でも、それを活用してウィンタースポーツシティを目指しましょうという発想ですね。リソースを掘り起こしていくと、そうしたことがありそうな気がするのですね。

そういったものを経済の目標、ビジョンとしてうまく掲げることがある種のわくわく感

につながっていくのではないのかなと事前に思っていました。でも、今日、皆様方が関連するご発言をされたので、私ももっともだなと思って伺ったということです。

これで一巡したのですが、委員の皆様方のご発言を受け、追加でご発言があれば、どうぞ遠慮なくぎくばらんにお話しただければと思いますが、いかがでしょうか。

○原田委員 これは後半で発言しようと思っていたのですが、経済と関係することなので、申し上げます。

わくわく感から若者の定住、スタートアップ、イノベーションみたいな話につながってきていました。また、今、平本部長がおっしゃったように、北海道には隠れた資源というのがたくさんあります。その最たるものが雪だと思うのですが、雪というのは冬のスポーツ産業は活発になりますけれども、人は定住しないのですね。それに、潰れていくスキー場は4シーズンのコンテンツが提供できていなくて、夏や秋のコンテンツが非常に重要です。年間を通じてそこに定住できるような仕組み、恐らく、エコシステムという表現がいいと思うのですが、そういうコンテンツをつくっていかないと、多分、わくわく感も出ないし、そこに来理由もできないと思いますので、そういう視点も重要かなと思います。

これに関しては、また後半で発言させていただきます。

○平本部長 おっしゃるとおりだと思います。冬だけだと、人も定住しませんし、業者としても1年分の売上げを半年で稼がなければいけなくなってしまいうわけですね。

ほかにいかがでしょうか。

○山本（強）委員 皆様のご意見を伺っていて、いろいろな視点があるかなと思って、勉強になりました。

わくわく感というキーワードがあって、僕もこれは大好きなのですが、札幌市民に向けたわくわく感と外から見えるわくわく感があると思うのです。これはどちらも大事で、対立してはいけないと思うのですね。

今、ニセコやウインタースポーツの話が出てきて、これは全くそのとおりだと思います。でも、札幌市の冬季の観光における役割というのはほかの地域とちょっと違うのです。ゲートウェイシティという役割があって、札幌を拠点にして、例えば、ニセコや富良野へ、あるいは、離島へという機能を持っていると思うのです。これをちゃんと打ち出さないといけませんし、ニセコと競争してどうのこうのではないと思うのです。それに、そういうポジションというか、札幌市の位置づけを構想の中にどんと据えると味方が増えてくると思います。そういうやり方もあるのではないのでしょうか。

札幌市が考え、札幌市が勝てばいいという論点にはしないほうが良いと僕は思っています、ぜひそういう視点でビジョンを考えてはいかがかなと議論を聞いていて思いました。

○平本部長 今回の山本強委員のご指摘はとても重要だと思います。札幌がウインターリゾートシティとして他の地域と競合することが今回の目的では決してないと思うのですね。ゲートウェイシティという位置づけもあると思いますし、ゲートウェイにすることによって札幌に滞在してもらえる日数をどうやって延ばしていくのかがあり、どこの付

加価値を強調していくのかも重要になってくるのだらうと思います。

ほかにございませんか。

○柴田委員 これは後半で言おうかなと思っていたのですが、取りあえず、二つぐらいキャッチフレーズを考えてみました。

経済のほうでは生産年齢人口の減少の話が出ていますが、その概念を変えるような盛り上げ方はないかなと思って、僕が考えたのは、生きがい創造都市というか、生きがい創造のまちというものです。

僕自身が経営しているのはNPOですが、NPOの経営の実はずごく難しいところは、生きがいを見いだす、つくらなければいけない、生きがいをつくらなければ、ボランティアも動かないというところです。そして、そこに文化はとてもよく関わっています。

生産年齢の話もありますけれども、実は、定年後に絵を描き始める人もいますし、子育てが終わってからスタートする人もいますし、稀ですが、それで経済的に成功する人もいます。そういうことを考えて、生産年齢のレンジを広げるまちづくりみたいな感じがあると魅力だなと僕自身は思っています。

○平本部長 今、柴田委員がおっしゃったことを聞いて思ったのですが、生産年齢というのはすごく経済的な言葉でして、富を生み出すということに主眼が置かれています。でも、生産という言葉と合うかどうか分からないけれども、心の豊かさをも生み出すという意味では、生産年齢という言葉の意味をもっと広げて捉えるのがいいのかなと思いました。

ほかにいかがでしょうか。

○佐藤委員 せっくなので、コメントさせていただきます。

もしかしたら先ほど言ったこととかぶる部分もあるかもしれないのですが、実際にやっていく上で現実的にどうやったらそれを実現できるのかがいつも気になっているのです。現実的にそれをやっていく、攻略を考えるために必要なことは何かというと、最終的には経済やビジネスはアイデアだと思うのです。スタートアップの話もそうですし、わくわく感の話もそうだと思います。何でわくわくするかといういろいろなチャンスがあるからだと思うのですが、チャンスがないのはなぜかということ、やはり、まちが閉鎖的というか、オープンでないことがあるような気がするのです。

先ほど、私は、企業や学校、地域のそれぞれが固まってしまってオープンではない、つながりがないと申し上げたのですが、ダイバーシティからもいろいろな人が活躍できるという意味からもオープンであるというキーワードがすごく大切だなと思うのです。オープンであることによっていろいろな人たちがぶつかり合い、新しいアイデアやチャンスが生まれていくというか、ビジネスの基本の一つに、いろいろな人が出会うことによってチャンスが生まれるという構図があると思うのです。そういったチャンスがたくさんあるからこそ、最終的にはアイデアが生まれるし、創造性が出てくるのです。

北海道も札幌もそうですが、いろいろな資源がたくさんあって、魅力的だと言うのです

よね。みんなはいいと言うのだけれども、それを具現化してビジネスにしていこうというアイデアが決定的に欠如していて、だから経済もよくなっていかないみたいな悪循環もあると思うのです。

まず、まちとしてオープンであるということ、それに基づいて人も組織も団体もつながっていきけるようなまちであることがコンセプトとしてはとても大切なのではないかなと思いますので、それが何となく伝わる全体像というか、基本方針に含まれているといいのではないかなと思いました。

○平本部会長 オープンということがとても重要だというご指摘ですね。北海道は、地縁や血縁のしがらみが薄い土地だと言われているので、何となくオープンなのかなと思っているのですが、農村や漁村に行くと非常に閉鎖的だということを私自身も経験したことがあります。その意味では、札幌のような大都市がオープンネスを標榜することには重要な意義があるのだろうなと思いました。

それでは、佐藤委員、山本一枝委員の順番でお願いします。

○佐藤委員 一言だけですが、平本部会長がおっしゃることは本当にそう思います。北海道の各地域に行くと、外から来たビジネスに対して、おらのまちで何をやるのだというふうに見る傾向が強いなと思っています。でも、札幌の業界団体に話を聞きに行くと、よく言うと助け合いなのだけれども、悪く言うと外から自分たちを防衛するために固まっていて、外からの力やビジネスやチャンスに閉鎖的なのところがあるのです。それは、もちろん大学もそうだと思います。

ただ、勇気を持ってオープンにしていくというのは、自分たちだけでは難しいところがあるので、それがまちの方針として示されて、そのためのきっかけが提案されているということがとても大切なのではないかなと思いました。

○山本（一）委員 佐藤委員のお話につながるのですけれども、私どもは、21年前に北海道中小企業家同友会の中に産学官連携研究会H o P Eというものを持ち上げて、毎月、研究会という産学官がオープンに出会う場所をつくり、プラットフォームとして活動しております。これまでも、発表の場を通じ、大学のいろいろな方たちとのつながりができておりますけれども、我々の組織も学生にもう少しオープンにやっていくことがすごく重要ななと思いましたし、私たちは20年活動しておりますけれども、割と知られていないのだと驚きました。

その中では、商工会議所ともつながったり、ビジネスサロンのようなものをつくったり、いろいろなことができる可能性があるなと思っています。オープンではないというご指摘がありましたけれども、我々中小企業というのはオープンでないと生きていけない部分がございます。情報の収集もそうですし、いろいろな方たちとの出会いもそうでした、我々の組織でも積極的にやっていきたいなと思いましたので、いろいろな方たちとのつながりを持てるよう、今の札幌市の発展のために何かをしていきたいなと考えました。

○平本部会長 中小企業家同友会としての組織はもちろんですけれども、よりオープンな

方向性を目指していただけるということで、ありがたいご提言だったと思います。

ほかにいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○平本部長 もしほかになければ、ちょうど11時になりますので、ここで次の話題であるスポーツと文化に移りまして、残った時間で、経済、スポーツ・文化を合わせて、もう一度、ざっくりとした議論ができればと思いますが、二つ目の項目に移ってもよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○平本部長 それでは、スポーツ及び文化についてのご説明を事務局よりいただきたいと思えます。

○事務局(本山企画課長) それでは、資料2のスポーツ・文化分野をご覧ください。

1枚目の資料には、先ほどの経済分野と同様に、基本目標を導き出した経緯を記載しております。

前回の審議会でお示した案からの変更点は、基本目標14の赤字の箇所となります。複数の委員の方から、札幌の気候は、ウインタースポーツに限らず、夏のスポーツを行うにも適しているとのことをご意見をいただいたことから、「四季を通じて」という文言を追加しております。

それでは、1枚おめくりください。

基本目標13の「世界屈指のウインタースポーツシティ」から順に説明させていただきます。

ここでは、「目指す姿」の案を二つ掲げています。

「目指す姿」の一つ目は、「身近なところでウインタースポーツを楽しむことのできる環境が充実しています。また、札幌で育ったウインタースポーツのアスリートが国内外で活躍しています。」としています。市民が身近でウインタースポーツを楽しめる環境が充実することはもとより、アスリートの育成強化のためのハイパフォーマンススポーツセンターを誘致するなど、ウインタースポーツの裾野の拡大やアスリートの育成環境等を整えていくという観点になります。

「目指す姿」の二つ目は、「豊富な降雪量と都市機能を合わせ持つ世界でも稀有な環境を生かして、大規模なウインタースポーツ大会を誘致・開催し、世界から注目されています。」としています。これは、年間5メートルもの積雪がありながら高い都市機能を持つという強みを生かして、ウインタースポーツを中心とする大規模な大会を誘致していくことで、ウインタースポーツを盛り上げるだけでなく、世界に向けたシティプロモートの機会とするという観点になっております。

「私たちが取り組むこと」は資料の右上に掲載しております。

1枚おめくりください。

基本目標14は、前回の案から赤字の文言を加えて、「四季を通じて誰もがスポーツを

楽しめるまち」としています。

「目指す姿」の一つ目は、「誰もがスポーツを楽しみながら、心身ともに健康で充実した生活を送っています。」としています。これは、年齢や障がいの有無にかかわらず、日常的にスポーツをする、見る、支えることができる環境が充実しており、いつまでも健康に暮らすことができるという観点になります。

「目指す姿」の二つ目は、「スポーツをきっかけに国内外から人が訪れ、地域経済が活性化しています。」としています。これは、スポーツツーリズムの推進、さらには、スノーリゾートのブランド化を視野に入れて、スポーツをきっかけとした関係人口の増加という観点になります。

「私たちが取り組むこと」は資料の右上に記載しております。

1枚おめくりください。

基本目標15は、「文化芸術が心の豊かさや創造性を育むまち」としています。

ここでは、「目指す姿」の案を三つ掲げています。

「目指す姿」の一つ目は、「誰もが文化芸術に親しむことができる環境が整い、多様な価値観が受け入れられています。」としています。これは、日常的な文化芸術、例えば、鑑賞や創作活動への参加のほか、文化芸術施設の整備、アーティストなどの担い手支援を想定しています。文化芸術が持つ社会包摂機能と多様性への理解を促すという観点も含んでおります。

「目指す姿」の二つ目は、「札幌ならではの文化が生まれ、世界に発信されるとともに、様々な分野との連携により新たな価値が創出され、まちの魅力が向上しています。」としています。これは、札幌で生まれた文化を国際的な文化芸術イベント等を通じて世界に発信していくだけでなく、文化芸術を契機とした関係人口の増加という観点も含んでいます。

なお、事前にお送りした資料の案では、行政が関わる分野に限定するような表記となっておりますでしたが、この先10年で、行政、民間など、主体を問わず、様々な分野との連携が考えられるため、広く意味を捉えられるよう、様々な分野という表現に変更しております。

「目指す姿」の三つ目は、「文化・文化財を適切に保存し様々な形で生かすとともに、札幌への愛着を深めることで、札幌の自然・歴史・文化が未来へ継承されています。」としています。自然の歴史やアイヌ文化、札幌市制が始まってから築かれた文化など、長い歴史を通じて様々な文化が生まれており、こうした文化、文化財を未来へ継承していくという観点になります。

なお、事前にお送りした資料の案では、若干読みにくい表現がありましたので、文言を一部修正しております。

「私たちが取り組むこと」は資料の右上に掲載しておりますが、行政だけでなく、市民、企業も一緒に取り組む必要のある分野だと考えております。

私からの説明は以上でございます。

○平本部長 それでは、ただいまご説明いただきましたスポーツ及び文化に関する基本目標と私たちが取り組むこと等について、挙手をしてご発言をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

それでは、山本一枝委員、柴田委員の順にお願いいたします。

○山本（一）委員 私も教育大学で美術を学んでおりました。当時は同じ大学の中に音楽もあり、先生になる方は多かったのですけれども、プロでご活躍できる方は非常に少ないということが結構問題だったと思います。プロで活躍される方たちは、一定の評価を受けた後、海外へ進出して成功されるという形になりがちですけれども、札幌市内で活躍しながらきちんと仕事をやり続けられるような環境はまだあまりないと思います。

例えば、個人的な個展はありますし、いわゆる展示のためのいろいろな組織はありますけれども、美術にしても音楽にしても、世界に売り込むための商業的な展示会のようなものの存在を私はあまり知りません。そのようなものがあって、札幌にはこれだけたくさんのポテンシャルがあると示すことができれば、今はリモートでも仕事ができる時代になっておりますので、海外での活躍のチャンスが回ってくるのではないかと思います。

特に、音楽の方たちの話を聞くと、今のコロナというかなり厳しい現状の中で、音楽活動自体が中止されていて、苦しい思いをしていらっしゃるということです。逆に言えば、皆さんを後押しして、せつかく現実にあるものを消してしまわず、活躍の場をどんどん増やしていけるような仕組みづくりをぜひやっていただけたらと思います。

○平本部長 芸術家の方々がプロとして活躍できるような何らかの仕組みを、物理的な札幌市にとどまらずに、リモートなども含めて考えていくことがスポーツ・文化振興に資するのではないかというご発言でした。

次に、柴田委員、お願いいたします。

○柴田委員 まず、全体としてスポーツ、文化が一つの枠になっていますよね。スポーツのほうには具体的なことが結構書かれているのですが、文化のほうは特徴のある言葉がほとんど見当たらないという感じを得ています。スポーツと芸術文化が一緒になっているのが日本の特徴ですが、芸術文化予算が幾らか分からないままずっと来ているという感じで、それは札幌市もそうだと思います。僕も芸術・スポーツ文化学科という混ざった学科をつくって、そのビジネス専攻というところなのですが、芸術とスポーツの関わりについてはとても気になっているのですね。

ウインタースポーツ、それから、オリパラという言葉がすごく出ているのですが、今回、コロナ禍でのオリンピックを経験したわけです。そこでは、いいところもあるけれども、ネガティブな問題もたくさん出てきていまして、ウインタースポーツ自体はいいと思うのですが、オリンピックを明確に目指すことがいいのかどうかについてはこれから議論の余地があると思っています。

僕自身は、モエレ沼公園ができたとき、7年間、冬のプロジェクトをやってきました。冬に関しては、スポーツだけではなく、雪まつりもそうですけれども、北海道には技術が

あると思っていますのです。そして、それは、伝統芸能的などというか、伝統文化的な技術でして、その技術は世界レベルにあると思っています。そこで、僕が提案したいのは冬の文化首都宣言です。これは、芸術もスポーツも含め、幅広いものです。その中にもしかしたらユニバーサル的なことも入るかもしれないし、観光も入るかもしれません。緩く大きな概念をつくるということです。

今、京都が文化首都・京都という言葉を使っていますが、もともと創造都市がはやる前にEU文化首都というものがあつたのです。文化首都という名前をつけることによってEU全体からお金や人を集めるという仕組みがヨーロッパでできているのですが、日本にはまだありません。それに冬に関して文化首都宣言をしているところはないので、それで世界の中のイニシアチブを取るということです。スポーツに関して、芸術文化に関して、世界の中のイニシアチブを取るということで、冬押しを僕はずっと推奨しています。ここ15年ぐらいずっと言ってきました。ここで何か一緒にできることがあればいいなと思っています。

特に、オリンピック憲章で、文化もやらなければ、オリンピックはできません。オリンピックの中には、もともと、彫刻やたこ揚げなんかもあつたのですが、そういう大きな概念で見るといいなと思っています。

○平本部長 そもそもスポーツと文化が一緒にいいのかという問題意識から、最終的にはそれを融合した冬の文化首都宣言という非常に魅力的なご提言だったと思います。

原田委員に挙手をいただいておりますので、お願いいたします。

○原田委員 意見を簡潔に三つにまとめてお話ししたいと思います。

まず一つ目ですが、スポーツ掛ける観光という言葉で、スポーツツーリズムという文言をぜひ入れていただきたいなと思います。それは、先ほどと関連して、ウインターというのは重要なのですが、産業として定着していくには四季を通じた観光コンテンツをこれから発展させなければいけないので、スポーツツーリズムという文言が非常に適切かなと思っています。実際、北海道でも、今、アドベンチャーツーリズムがかなり積極的に展開されていますので、それを包含する概念としてスポーツツーリズムを入れていただきたいなと思います。

今後、ビジョンをつくり、戦略をつくり、それを戦術に落とししていくのですが、今で言うエビデンス・ベスト・ポリシー・メイキングですね。先ほどのデータを重視したような政策展開をそこできっちりやっていただきたいなと思います。

二つ目は、基本目標14にありますスポーツによるまちづくりですが、これには非常に共感しています。私もほかの自治体のアドバイザーをやっていますけれども、例えば、名古屋ではアクティブシティーという文言を取り入れてもらっています。スポーツといっても、体操服に着替え、準備運動をやって、体育の授業で習ったことをやるのではないということです。ちょっとアクティブに健康づくりをするようなアクティブシティーというのは、欧米を中心に、今、脱炭素という観点からも非常に広がっておりますので、やってほ

しいです。

私は、今、名古屋の2026年のアジア大会のビジョンづくりもやっているのですね。名古屋の久屋大通を見られた方も多いと思いますが、日本最大の Park-PFI です。ちょっと前まで鬱蒼とした森みたいな場所でしたが、今は高級ブティックやおしゃれなカフェ、図書館が軒を連ねており、がらっと変わりました。物すごい人出もあります。

札幌の大通公園も、そういった文脈の中で、新たな公民連携の仕組みで公募型プロポーザルをやり、ぜひ変身してほしいなと思っています。650メートルのテレビ塔をつくるようなばかなアイデアがありましたが、ああいうものはやめて、今あるテレビ塔を変えていくのです。例えば、名古屋のテレビ塔は、今、高級ホテルになっていますが、そういった今あるものを大切にしながらアクティブなまちづくりをしていくことが重要なと思いますので、それをスポーツのまちづくりの中に埋め込んでいただけたらなと思います。

三つ目ですが、先ほど柴田委員からありましたように、2030年に本気でやるならばどうするというような議論がそろそろ始まると思います。私の個人的な感想ですが、夏のオリンピックは招致活動なしで、パリ、ロス、ブリスベンですか、2030年までの夏季のオリンピックはIOC主導で決まってしまったのですね。でも、イタリアの次はどこだという話になります。私は、このまま行くと、IOCから札幌市にやってくださいとのお願いが来るとしています。そうすると、招致費用として積んでいた40億円ぐらいは使う必要がないという非常にいい状況なのですが、果たして、2020年の後、コロナでこれだけぐちゃぐちゃになったオリンピックを札幌でやるのですかという話になると思います。来るのは2023年か2024年ぐらいの7年ぐらい前かなと思いますが、そうなったときに札幌はどうするのだという合意形成ですね。私としては、先ほど言ったようなアクティブシティをつくるためにそれを利用すればいいのではないかと考えております。その心の準備をしておいていただき、それをまちづくりに生かしていくようなしたたかな戦略が必要ではないのかなと思います。

最後ですが、ハイパフォーマンススポーツセンターを誘致するという文言についてです。こういったものは国の仕事であって、市がやる仕事ではないと思っています。莫大な予算が必要です。ナショナルトレセンからウインター版を札幌につくってください、予算はこれだけですみたいな話になれば取り組んでもいいと思うのですが、ハイパフォーマンススポーツセンターについては国にお任せしていい事業ではないのかなと考えており、あまりこれを声高に言う必要はないというのが私の個人的な意見です。

○平本部会長 スポーツツーリズム、アクティブシティと2030年の冬季オリパラの招致をうまく連動させるべきだというご指摘は大変説得力があると思いますし、もし2030年の冬季オリパラを招致するのであるならば、札幌市の戦略的な招致にならないといけないと私も思っています。

それから、ハイパフォーマンススポーツセンターについては、今、ご指摘のことを含めまして、事務局にご検討いただきたいと考えております。

ちなみに、今、札幌市では、アドベンチャートラベルワールドサミット——ATWSというアドベンチャートラベルに関する一大イベントが行われています。この点は前半にご発言をいただいたビジネスクラスのツーリズムと関連するので、非常に時宜にかなっているのかなと思います。

ほかにいかがでしょうか。

川島委員、中田委員、山本強委員の順番でお願いいたします。

○川島委員 先ほど事務局からお話がありましてとおり、スポーツは、見る、する、支えるという三つの視点が重要となっています。これを踏まえて基本目標の目指す姿を拝見しました。当然、この三つの視点が包含されているとは思われるのですが、するに重点が置かれているのかなという気がしました。とはいっても、本文にこの三つの視点をそれぞれ加えるのは非常に難しいと思いますので、私たちが取り組むことの市民・企業と行政の取組の中に、大規模スポーツ大会の観戦を企業が促進する、企業がスポーツボランティアやNPOの参画を進めたり、活用を促進していくような要素を入れ込んでみてはどうか、と考えました。

続いて、基本目標14の下の今後の課題、新たな視点のところにトップアスリートのサポートやICTの活用促進などを通じて得た医科学的知見を市民に還元する仕組みというところについてです。これは、先ほど原田委員がお話ししたとおり、多分、ハイパフォーマンススポーツセンター等を念頭に置かれているのだと思うのですが、このような機能や設備がないと医科学的知見を数値的に表して市民の方に還元するのは非常に難しいのかなという率直な意見を持ちましたので、それをお伝えします。

○平本部長 見る、する、支えるのうち、するだけに重点を置くのではなく、バランスを取らなければいけないということ、また、医科学的知見のフィードバックというのは大規模なトレーニングセンターのような施設との連動がないと難しいのではないかとご指摘でした。

次に、中田委員、お願いいたします。

○中田委員 今ほど川島委員と原田委員からお話があった件です。

まず、国際的なスポーツ大会を誘致することもさることながら、トレーニングを積むための場の提供としても非常に有効ではないのかなと思います。そういった意味から、今ほどお話がございましたハイパフォーマンススポーツセンターや国際トレーニングセンター的なものを設置するということなのでしょう。

確かに莫大な費用がかかりますので、国が中心となってやっていただく事業であると思うのですが、これを設置することによって、国内だけではなく、ウィンタースポーツをきちんと国際的にやりたいというアジアの雪の少ない国の方にも門戸を開くことになるのかなと思います。そうなりますと、地域での長期滞在もかなうと思いますし、地域の子もたちとの間での交流も広がる可能性があると思います。

それとともに、整形外科を中心とした医療との関わり合いもかなり出てくると思います。

そういった意味では産業あるいは医療に関することも発達し、寄与するのではないかなと思います。

また、先ほど、経済のところでも話がありましたし、原田委員からも話がありました、スポーツツーリズムに関するところで、非常に同感です。今後10年間を考えたときに、新幹線が札幌まで延伸されます。そうしますと、スキーでニセコと札幌とつながります。こうした広域的な地域でもってウインタースポーツを楽しむことができるのかなと思います。

札幌だけではなく、ニセコも含めた札幌圏においてウインタースポーツをどう高めていくか、それを経済にどう結びつけていくかという視点が大事かと思えますし、新幹線の延伸によって時間的距離が短くなるということ捉えることが大事かなと思います。

今までは、ニセコに拠点を置き、例えば、札幌までタクシーで飛ばして夜を楽しんでニセコに戻るといったパターンもあるという話を聞いたことがありますけれども、距離的な時間が短くなってくると、札幌を拠点にしてニセコでスキーを楽しむ、あるいは、札幌でもスキーを楽しむこともできます。そうすると、アフタースキーではないですが、ウインタースポーツを終えた後にどうやって楽しんでいくかが大切になると思えますので、スポーツを楽しんだ後の楽しみ方、過ごし方の提供をどうしていくかという視点が問われるのかなと思います。

食という意味では非常に強みがありますので、おいしいものを食べる場を提供するというところも考えられますが、果たして食だけの提供でいいのだろうかということ。これは文化とも通じるところがあるかと思えますけれども、エンターテインメント的な楽しみをどう加えていくかという視点等幅広く考えることによって、スポーツと経済と文化が融合されていくのではないかなと思っております。

○平本部長 スポーツと経済と文化の融合はおっしゃるとおりで、とても重要な切り口だと思います。

また、ニセコとの距離については、前半に山本強委員がおっしゃったこととも関わりますけれども、ゲートウェイの都市としての札幌を考えたとき、今、中田委員がおっしゃったように、札幌にステイしながらニセコに足を延ばし、札幌に帰ってきてもらってナイトタイムエコノミーでお金を落としてもらうという構想も十分にあり得るのだろうと思いました。

そして、後志道は2024年度に倶知安まで延びることになっています。そういう意味では、新幹線を待たずしてそのようなことが現実に起こっていく可能性があるのかなと思ってお話を伺いました。

それでは、山本強委員、お願いいたします。

○山本（強）委員 私からは、本質的な始まりのことになってしまうのですが、スポーツという言葉について、実はこれは非常に曖昧なのです。スポーツとは何かという定義が実はないのです。

今、札幌で言うと、2030冬季オリンピックが頭にぼんと来て、競技スポーツとなる

と思うのですが、例えば、札幌市が考えるスポーツ・文化分野と書いてありますから、その説明が最初に要るのではないかなと思ったのです。

最近、情報系ではeスポーツがありますし、将棋や囲碁もスポーツだという論点があるのです。国が考えるスポーツには定義があるのだそうです。スポーツ基本法というものがネットで調べたら出てくるのですが、その定義と今ここで議論しているスポーツの定義は違うと思うのです。

行政的な文書だとすると、例えば、札幌市が、スポーツ振興、あるいは、スポーツを中心とした文化施策をこう考えるとするならば、やはり、スポーツの札幌市的解釈が一言あったほうがいいのではないかなと思います。

特に、アドベンチャートラベルは、今、スポーツというより経済的な話として語られていますね。私も関係した会議に出ているのですけれども、出てくる方々は、スポーツ関係者ではなく、ホテル・旅館業の方なのです。そういうことがあるので、北海道の文化を牽引する札幌市ですから、与えられたものではなく、私たちはスポーツの振興をこう考えるという一言があってほしいなと思いました。○平本部長 大変重要なお指摘かと思えます。全体会議の1回目、2回目のときの議論ですと、何となく、2030年の冬季オリパラの招致がある種の暗黙の目標になっており、その上でスポーツが議論されてきたようにも思えます。でも、オリパラ招致が札幌市の最上位の目標では決してないわけですし、その限りでは、スポーツとは何なのかをもう一回きちんと考えて、場合によってはeスポーツも入れて議論してもいいとも思えます。その意味で、今の山本強委員のお指摘は大変重要で、私は気づいていなかったもので、勉強になりました。

ほかにはいかがでしょうか。

それでは、佐藤委員、山本一枝委員、木村委員の順でお願いいたします。

○佐藤委員 今の山本委員のお指摘には僕も同感で、何を以てスポーツとするのか、何に向かって頑張っていくのかの基本的な理解はとても大切だと思うのです。例えば、オリンピックみたいな大きなイベントごとを持ってきてやるスポーツ、いわゆる、見るスポーツ、させるスポーツも大事ですけれども、それだけだと空回りというか、やはり知性や知的であることだと思うのです。

スポーツは、体を動かして丈夫だからオーケー、健康になったらオーケーということではなく、その向こう側に知的や知性みたいなものがあると思うのです。例えば、オリンピックを持ってきて、それで万歳で終わってしまうのがどうしても知的に感じられないのです。それが、我々が日常的にスポーツに触れるきっかけになったり、魅力を知って自分もやってみようと思えるかという、見るスポーツ、させるスポーツが、自分がするスポーツにつながっているかだと思うのです。

逆説的に、自分がスポーツをやって、夢中になって、頑張った結果、そういった大会がある、そういうところに出てみたいというチャンスがちりばめられていることがとても大切で、僕がいわば知性とか知的と表現したのは、恐らく、その両輪がちゃんとつながって

回っていることだと思うのです。イベントを持ってきてオーケー、箱物をつくり、チャンスはつくったけれども、みんながその魅力を知らないから使わずじまいみたいなものも知的ではないと思うのです。

その意味で、札幌が目指すべきスポーツ、文化というのは、いわば自分がするというチャンスがちりばめられていて、それを実際に表現したり、または、そのきっかけになったり、見る、させるというきっかけも両輪としてあって、それが循環しているということで、それが人々に定着しているし、そう定着することによって、見たいと思う人も増えれば見たいという人も増え、だから、箱物を使っても使われるし、イベントをやってもみんなが盛り上がると思うのです。誰かがどちらかだけをやろうとすると力業になるし、結局、それには民意がついてこず、箱物だけを使って無駄遣いとなるのです。結果、そのときに使われる言い訳が経済のような気がするのです。経済を回すために必要だというきれいごとにつなげられているような気がしていて、それも知的ではないなと感じます。

札幌市が目指してほしいと思うのは知的であることで、知性とつながったという意味で文化やスポーツが盛り上がっていくというような循環というか、そういう仕組みをつかっていくということを押し出すと札幌らしさが出てすごくいいのではないかなと思いました。

○平本部会長 スポーツなのだけでも、知性とか知的であることが重要だというご指摘は今まで考えたことがなかったのですけれども、とても説得力のあるご指摘ですね。確かに、東京オリンピックの喧騒をやや白けた気持ちで見た国民が多かったのは、そこに知的なものが欠如していたからなのではないかと気づかされました。

次に、山本一枝委員、お願いいたします。

○山本（一）委員 スポーツという大上段に構えるのではなく、札幌市内にはとても美しい景色や四季を通じたすてきなものがたくさんありますし、いろいろな公園を歩き回るのがとても好きなのです。ところが、冬になりましたら、滑って危ないので、地下街を歩くしかないのです。実は冬の景色もきれいなのですけれども、歩き回れるような道路の環境にはありません。歩道も横断歩道もそうですけれども、つるつと滑って転んだら骨を折ってしまいそうな状況があり、20年ぐらい前から我々の中でもそういったことにチャレンジしている企業もありましたけれども、なかなか改善されておられません。

現実にパラリンピックが本当にこの雪の中でやれるのだろうか心配になるほどの滑る環境で、冬の歩けない状態は改善されておられません。もしも外の美しい景色を見ながら歩くことができるのであれば、高齢者の方の健康促進にもなりますし、観光客の方もたくさんの美しい札幌を印象深く心にとどめることにもつながりますので、ぜひ、冬の歩ける環境整備をお願いしたいと思います。

○平本部会長 確かに、私も何度も滑って転んだことがありますので、冬は地下街を歩きたいですね。やり方はいろいろあるのではないかと思いますし、そういったご指摘も10年後の札幌に実現できているといいなと思いました。

次に、木村委員、お願いいたします。

○木村委員 私も、文化とスポーツのところが何かふわっと一つの項目になっているというのは気になっていました。多分、札幌市としても、文化や芸術が大事ではないと思っているわけではないのですが、もともと持っているものが少ないなと思っているから、きっとふわっとしたくくりになるのだろうなと私は推察しています。

東京や大阪にはいろいろな文化芸術があって楽しかったのです。札幌出身者として札幌に戻るとき、正直、その楽しみはなくなるなと思って帰ってきました。そういうことが楽しみたいときは、ロンドンやブロードウェイ、あるいは、東京や京都へ旅行に行つて楽しむと考えました。申し訳ないけれども、札幌市はそういうものが相対的に少ないと思っています。

そもそも、日本の文科系の予算規模は他国と比べて多く割り当てられているわけではないですし、文化芸術に尖ったまちというと、歴史上、1000年や2000年をかけてそこに蓄積されていたり、そこそこの人口規模があって、文化芸術の特徴ある観光資源にもなるまちになるのかなと思っています。

ないものはないとはっきり示さなくてもいいのですし、文化・スポーツでふわっとまとめていいと思いますが、日本で唯一、亜寒帯で雪が降っているけれども、180万人が住んでいるところだから、ウインタースポーツが強みだろうということをはっきり示し、そこから文化・スポーツみたいな目標をつむぐほうがいいのではないかなと私は思います。

ないのに文化のところで目標をふわっと掲げるよりも、冬のウインタースポーツのところにくっつけ、その文脈で文化を語るほうがよほど尖るし、潔いのではないかな、伝わりやすい目標になるのではないかなと私は思います。

○平本部長 文化は、他の都市に比べて少し劣っているもので、むしろ開き直ってきちんと位置づけたらどうかというようなご指摘かなと思いました。それも一つの考え方だと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○柴田委員 今の木村委員の意見にも関連することです。

スポーツのほうは細かい施策がいろいろと出ているのですけれども、文化のほうは具体的なものがあまり出ていないのです。多分、札幌の文化行政の弱点がもろに出ていると思うのです。

創造都市というものが結構広がっており、札幌市もそれに所属していますが、そういう都市にあつて札幌にない機関が一つあつて、それはアーツカウンシルです。今、日本の中では十何か所あると思うのですが、北海道ではその動きがなく、文化庁もお金を出そうとしているのですが、受け取り先がないと相談されたのが5年ぐらい前でした。

つまり、政策や計画を立てるところ、それから、ヨーロッパの場合だと、自分たちで予算の配分権まで持つのですけれども、そういう専門機関がないのです。もちろん、財団もありますし、文化課もあるのですけれども、東京、大阪、金沢、沖縄ではそこに関連づけ

た別組織をつくっているのですね。ですから、そうしたアーツカウンシルをもうそろそろ札幌市でも設置してもいいのではないかなというふうに提案したいと思います。

○平本部長 アーツカウンシルが必要だというご指摘で、なるほど、そうだろうなと思いました。

木村委員と柴田委員のご発言に関連し、思い出したことがあります。

しばらく前にある方と話していたら、札幌市は文化的な都市だよねと言うのですね。何かといいますと、PMFのバーンスタイン、モエレ沼公園のイサム・ノグチなど、世界的に物すごく著名なアーティストが2人も札幌市にゆえんがあって、しかも、それが今もきちっと定着している、すごい都市だよねということでした。確かに、PMFもイサム・ノグチの存在も知っていたのだけれども、それがそんなにすごいことだということ意識したことがなかったのですよね。

前半でも少し申し上げましたが、我々市民が必ずしも意識していないのだけれども、世界から見るとすごく立派な資産やリソースがあるのかもしれないということも含め、文化をもう少し位置づけることが必要かなと思います。

原田委員が手を挙げてくださっておりますので、ご発言をお願いいたします。

○原田委員 簡単に2点のコメントをさせていただきます。

まず、文化についてです。

東北なんかを中心に雪育という概念が取り沙汰されています。雪の教育ですね。雪国の文化を学ぶというものでして、それは一つのアプローチのきっかけになるかなと思います。

札幌市は、急激に人口が増えて、過去200年で200万人都市になったところです。ナイロビと札幌だけだそうなのです。観光地といいますか、奈良時代のお寺などが無いのです。神社仏閣も全て非常に新しいので、そういう意味での観光資源は少し残念なところがあると思います。

ただ、先ほどの柴田委員の言うように、アートというのは、歴史の蓄積がなくても、現代的なアートや現代的な音楽もありますので、非常に重要なコンテンツだと思います。私はアルテピアッツァ美唄なんかに行くのですけれども、素晴らしいのです。イタリア人がアルテピアッツァに来て、何でここにファイブスターのホテルをつくらないのだと思いました。美術館の横に1泊10万円や20万円のホテルをつくれたらいけるぞという話です。土地の値段を調べると坪1万円くらいですよ。特急が止まる美唄の駅で、アルテピアッツァがあるのですから、何かもっとできることがあるだろうと常々考えているのです。これも将来に向けた宿題かもしれないなと常々思っております。

○平本部長 雪育のほか、リソースをまだ活用できるというお話と関連する美唄の事例のご指摘でした。

ほかにはいかがでしょうか。

○柴田委員 何度も発言してすいません。僕の周りからぜひ言ってほしいと言われたことがあるので、申し上げます。

今、僕の事務所があるところは10年ぐらい使われていなかった古い倉庫で、床も抜けていたようなところでしたが、15組ぐらいの芸術家たちが自分たちで壁づくりから始め、再生していったのです。苗穂のアートスタジオというところ。建って3年なのですが、元苗穂駅の前にあるずっと使われていなかった倉庫です。

そこで、僧侶でアーティスト、弁護士でギャラリスト、あるいは、絵だけで食べることに挑戦し、今やっとプロになったアーティストなども出てきているのですが、20代から60代ぐらいまでいます。彼らに札幌では今後どういふことがあるといいだろうねとやんわり聞いてみたところ、中高年へのサポートが欲しいとぜひ言ってほしいということで、若い人たちや女性に向けての賞はあるけれども、中高年の人たちに向けてのものが無いということです。

多様性という中には、先ほどの生産年齢も含め、年齢の問題があります。特に、今、高齢化の中で人生の生きがいを見いだすことにとってもすごく意味があると思います。また、使われていなかった倉庫を再生したというのにも中高年の人たちの目線が入っているわけですね。10代の子はそういうことをやろうとしないわけ。そして、ここができたことで近所の使われていなかった民家の再生も始まり、今、芸術家たちがミミズのように自分たちで工事し始めているのです。

このように、幾つになってもチャレンジができるみたいなことも含め、中高年の活動をプッシュするような政策も入れてもらえるとありがたいなと思いました。

○平本部長 確かに、前半に出たスタートアップなども若者や学生のスタートアップみたいなことを無意識のうちに想定していましたが、人生100年の時代に、場合によっては、会社を定年した後に起業する方も出てくると思います。年齢は62歳だけれども、起業家としては駆け出し、新米なんていう人もたくさんいる時代になってきているわけですね。そうすると、単純に、35歳以下、40歳以下と区切って何らかの支援をすることはあまり適切ではなく、経験年数による支援もあるかと思います。あるいは、中高齢者に向けての支援も必要になるというご指摘で、特に、芸術の分野では、年齢は必ずしも直接的なパフォーマンスに関わりがない可能性があるということでした。

ほかにいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○平本部長 全体会議で佐藤委員がおっしゃったことだと思うのですが、札幌のカルチャー、文化というと初音ミクだよねということがありました。そうしたサブカルも立派なカルチャー、文化だと思うのです。

ですから、1000年続く神社仏閣がないから文化がないのだと考えなくてもいいのかもしれない。初音ミクだったり、ゲームのキャラクターだったり、あるいは、若者向けの音楽だったり、そういったことを日本や世界に向けて発信している著名なグループが札幌に幾つかあると思います。そういったものを含めてカルチャーだと私は思っています。高尚な文化芸術だけがスポーツ、文化ではないのかなという気がしておりますので、文化

ないしはアートをもうちょっと広く捉えてもいいのかなと感じております。

委員の皆様方、時間が10分強ほどございますので、もしご発言があれば、ざっくばらんに思いついたことをお話いただければと思います、いかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○平本部長 それでは、原田委員に一つだけお聞きします。

先ほどの2030年の札幌冬季オリパラの招致の件です。1回目の全体会議のとき原田委員が、冬季オリパラができる都市が世界中で減っているというご指摘をされたかと思えます。そうすると、将来的にも冬季のオリンピック・パラリンピックを続けるならば都市が限定されてきますよね。そうなったとき、初めから、札幌は12年に1回、冬季のオリパラを招致します、その代わりに、IOCにもお金を出してもらい、立派な施設をつくって、要はウインターオリンピック・パラリンピックシティ札幌というような戦略的な誘致はできないのかなということをお夢想するのですけれども、それはばかげていますでしょうか。

○原田委員 スイスが国の方針で永久にオリンピックを招致しないとしました。なぜなら、オリンピックが来ると、スイスのスキー場が経営的に非常に厳しくなるから、一般のスキー客を追い出すわけですから、やめましようかと決めているので、スイスは候補から消えています。アメリカとフランスも、ロスとパリで夏の五輪をやるので、候補から消えています。そう考えるとないよね、あとは共産国ですかという感じなので、IOCから依頼が来ると私は思ったのです。

今、平本部長がおっしゃったのは、定期的にオリンピックをするという一つの提案ですよ。実は、夏も1か所に決めてやれという意見もありまして、一つのオプションとしてはありかなと思いますので、そういう提案も可能かもしれません。あとはJOCとの話し合いですね。

○平本部長 思いつきのような内容で失礼いたしました。

ほかの委員の皆様方はいかがでしょうか。

○山本(一)委員 以前、雪まつりのときにファッションショーをやっているのを見かけたことがあります、ファッションも文化の中の大きな核になるかと思えます。

札幌の人は歩いていておしゃれだと東京の方から聞くことがありますし、ファッション都市とすると経営的な観点からいっても新たなビジネスのチャンスが生まれるのかと思えます。多分、デザイナーの方もおられると思いますので、札幌を拠点とされているいわゆるファッションデザイナーの方などをピックアップしてはどうかとも思えます。

○平本部長 おっしゃるとおり、ファッションも文化ですよ。食文化と言うぐらいだから、食も文化の一部をなしているかと思えます。

今回、スポーツと芸術、音楽をイメージしていたのですけれども、文化の中身をもう少し広げることによって札幌の魅力をより明確にできるのかもしれないなと思いました。

ほかはいかがですか。

(「なし」と発言する者あり)

○平本部長 今日、ほぼ予定の時間になりました。前半では経済の問題について、後半ではスポーツと文化の問題について、基本目標と私たちが取り組むべきことについてかなり活発にご議論をいただきましたと思います。

会議というのは、やはり、これぐらいの人数でやりたいですね。全体会議だと、お1人に1回ぐらいしかご発言をいただかず、私自身ももどかしい思いをしていたのですが、今日は、委員の皆様方のそれぞれのお立場からかなり活発なご議論をいただきました。有意義なご議論・ご提言をいただきまして、ありがとうございます。

それでは、5分ほど早いのですが、大体、議論が尽きましたので、本日の審議はこれにて終了したいと思います。どうもありがとうございます。

それでは、事務局にお返しいたします。

3. 閉 会

○事務局（浅村政策企画部長） 本日は、長時間にわたりまして、委員の皆様、ありがとうございます。様々なアイデアや知見をいただきました。整理に若干の時間がかかるかもしれませんが、反映したいと思います。

また、今日の議論の対象ではないほかの分野にわたる話や戦略編で反映もしくは深掘りできるようなアイデアもいただけたと思っております。そういったことも含め、事務局で整理をさせていただいて、次回、またご議論を深めていただければと思います。

本日は、ありがとうございます。

それでは、事務局から連絡事項をいたします。

○事務局（本山企画課長） それでは、次回の会議についてご説明をいたします。

次回の第3回目の審議会は11月頃に予定しております。日程調整等については、委託業者であるノーザンクロスを通じ、後日、改めて連絡をさせていただきます。

なお、次回の議題については、皆様からのご意見を踏まえて再検討した都市像、基本目標についてご議論をいただきたいと考えております。詳細については改めてご案内をさせていただきます。

○平本部長 どうもありがとうございました。

本日は、大変有意義で活発なご議論をいただき、ありがとうございます。今回の専門部会での議論を受け、次回の専門部会につなげていきたいと思っておりますので、引き続き、どうかご協力のほどをお願いいたします。

本日は、どうもお疲れさまでした。

以 上